

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

心安かれ、我なり

――マルコ伝第6章45～56節――

1964年11月8日

小池辰雄

イエス海の上を歩みて 心安かれ我なり懼るな 本願の助力に全托 鴻大なる福音 御霊における棄身の事態

【マルコ6・45～56】

45 イエス直ちに、弟子たちを強いて舟に乘らせ、自ら群衆を返す間に、彼方なるベツサイダに先に往かしむ。46 群衆に別れてのち、祈らんとて山にゆき給う。47 夕になりて、舟は海の真中にあり、イエスはひとり陸に在す。48 風逆らうに因りて、弟子たちの漕ぎ煩うを見て、夜明の四時ごろ、海の上を歩み、その許に到りて、往き過ぎんとし給う。49 弟子たち其の海の上を歩み給うを見、変化の者ならんと思ひて叫ぶ。50 皆これを見て心騒ぎたるに因る。イエス直ちに彼らに語りて言い給う『心安かれ、我なり、懼るな』51 斯て弟子たちの許にゆき、舟に登り給えば、風やみたり。弟子たち心の中にて甚く驚く、52 彼らは先のパンの事をさとらず、反つて其の心鈍くなりしなり。

53 遂に渡りてゲネサレの地に著き、舟がかりす。54 舟より上がりしに、人々ただちにイエスを認めて、55 遍くあたりを馳せまわり、その在すと聞く処々に、思ふ者を床のままつれ来る。56 その到りたもう処には、村にても、町にても、里にても、病める者を市場におきて、御衣の總にだに触らしめ給わんことを願う。触りし者は、みな医されたり。

●イエス海の上を歩みて

今日はマルコ伝6章45節から56節までですが、並行記事としては、マタイ伝14章22節から33節で、マタイ伝の方が少し詳しいくらいに書いてあります。かつて、マタイ伝によりまして、「湖上のイエス」と題して幕屋でお話をしたところです。

45 イエス直ちに、

「イエス直ちに」という。マルコ伝とはいかなる福音書であるか。

「マルコ伝は直ちに」という福音書である」

と答えたらおもしろいと思います。非常に「直ちに」という言葉がたくさん出てきます。



即刻に受けとって行動に移す、これが即ちマルコ伝の素晴らしさです。行的なキリストの福音の現れているゆえんです。ギリシヤ語では「ユートウス」という字です。

弟子たちを強いて舟に乗らせ、自ら群衆を返す間に、彼方なるベツサイダに先に往かしむ。⁴⁶群衆に別れてのち、祈らんとて山にゆき給う。

五千人の者に、更に余るほどのパンを与えられたあとのことです。

「祈らんとて山にゆき給う」

と。ここで夜もすがら祈られたわけです。マタイ伝の方では、

「²³祈らんとて^{ひそか}窃に山に登り、夕になりて独りそこにい給う」

とある。夜をあかして祈ろうとされた。

⁴⁷夕になりて、舟は海の真中にあり、イエスはひとり陸に在す。⁴⁸風逆らう

に因りて、弟子たちの漕ぎ煩うを見て、夜明の四時ごろ、

というのですから、なかなかこれが始末の悪い風で、行くに行かぬ退くに退かれずというような始末であつた。それで、夜明けの4時ごろ――夕べの6時から3時間ずつ時を数えるわけですから、これは「四の時」です。6時から9時、9時から12時、12時から3時、3時から6時と、四つに別れている。だから、四の時になります――そろそろ白々してくる時です。

海の上を歩み、その許に到りて、往き過ぎんとし給う。

ここに「往き過ぎんとし給う」と書いてある。マタイ伝の方では、

「²⁵イエス海の上を歩みて、彼らに到り給いしに、²⁶弟子たち其の海の上を歩

み給うを見て心さわぎ」

とあるが、マルコ伝の方では

「往き過ぎんとし給う」

と書いてある。海の上を歩くというようなことは、ちよつと桁違いの現象でありまして、普通の物理的な法則では分からない。けれども、キリストの如き完全に聖霊の化体された方が深く祈られ、神に導かれるときは、このような事態が起きる。

⁴⁹弟子たち其の海の上を歩み給うを見、変化の者ならんと思ひて叫ぶ。

何か幽霊かと思つた。無理もない話です。マタイ伝の方にあるように、

「²⁶弟子たち其の海の上を歩み給うを見て心さわぎ」

と。マルコ伝の方には、

⁵⁰皆これを見て心騒ぎたるに因る。

とある。私たちは平常の現象を少しはずれたことにでつくわすと、先ず心騒いだり、うろたえたり、或いは疑つたり、とにかく分裂する。「分裂」「ツバイフェルン」というドイツ語は「二つに割れる」という字です。波が立っているうちに水が割れるように、心が割れてしまう。信仰の世界で、心の乱れ、分裂、右顧左眄、これは禁物である。まあ、人間です



から、いろいろなことにでつくわして、感情が動いたりします。けれども、直ちにそれが元にとり戻されなくては。そのためには平素、キリストの懷にある内接円的な一如の境地を祈り心で常にもつていないと、いかんわけですね。

●心安かれ我なり懼るな

今日も、こちらに来るときに、電車に空いている席がない。立って本を読んでもいいけれども、じつと外の景色を見ながら、もう私は目をつぶらなくても、景色を見ながら、その景色にとらわれることなしに、祈りの世界に入るようなことにだんだんなつて参りました。新宿をおりるときには、あるひとつの別の力が来ている。私たちが本当にこの

「キリストに在る」

ということを平素、本当に鍛えていかななくてはならないと思っています。

聖書は、この使徒たち、弟子たちのありさまを正直に客観的に叙してくれているので、ありがたいわけですが、これがみな、私たちの現実でもある。すぐ、あわてふためき、疑い恐れる。恐れたり、疑ったり、つまらない主観で批判をしたり、みなダメです。

イエス直ちに彼らに語りて言い給う『心安かれ、我なり、懼るな』

「心安かれ」という言葉は、そう訳してもいいけれども、

「しつかりしろ、勇気を出せ」

といったような、かなり積極的な言葉です。

「私である。懼るな」

という言葉はよく出てきます。この三つの言葉、

「しつかりしろ、私である、懼れるな」

ということが大事です。信仰の世界は、キリストの本願が――私は仏教のこの「本願」という言葉が非常に好きですが――キリストの深い憐れみの本願がかかっている。これは何ものも妨げることでできない力です。我々のこの信仰生活で、はつきりと御声を聞くという体験をしないと、本当の力にならない。単に自分の主観の想像や何かではない。これは本当に――何と言いますかね――聞こえるんです。これは預言者たちがすべてそれを聞き、また使徒たちがそうである。いわんやキリストにおいてはそうである。もちろん、そういった直接啓示的なものをただ神秘的に求めるのではなくして、聖書の聖言に深く裏付けられて、聞こえてくるのはこの聖書の言葉です。聖書の言葉が本当に忽然として今、現に自分に語られてくる。この御声は、

「我が言は靈なり、生命なり」

とは本当にそのことです。同時にそれは直ちに力となる。直ちに救いとなる。これは祈り心を普段、呼吸しているならば、神さまが、主が時にはつきりと語りかけてくださる。

「心安かれ、我なり、懼るな」



と。こういう御言はしっかりと肝に銘じておかななくてはならない。

「聖書にあらあ有ったが」

というようなただ自分の主観の応用ではなくて、響いてくる。

●本願の助力に全托

弟子たちはもう絶体絶命、ヘタすると舟がひっくり返ってみんなは溺れるという、ギリギリの現実です。どん底的現実です。キリストは山で祈っていて、ちゃんと彼らの現状を示されていらつしやるので、歩いてこられた。この劇的な場面は、ゲエテがエッカーマンとの会話の中で、1831年2月12日にゲエテが語ったという言葉の中に、

「私はキリストが湖上を歩いてこられて弟子たちを救われた、あの話が非常に好きである。信仰と、キリストが『しっかりせよ、勇気を奮い起こせ』と言われた、その生き生きとした勇氣によって、人生の極めて困難な事態を突破することができる。ところが、もし、ちよつとでも疑いの心が忍び寄って来れば、たちまち失敗するものだという、貴い教えが述べられている。」とある。

『来たれ』

というキリストの力強い御言に従って、ペテロは舟から下りて水の上を歩んでイエスのものに行つた。この信は不可能を可能ならしめている。不可能の現実を突破させる。正直、歩いて行けたというものの凄い現実です。ところが、

「³⁰然るに風を見て懼れ、沈みかかりければ叫びて言う『主よ、我を救いたまえ』」

（マタイ14・30）

「主よ、助けてください」

と。こないだ、木曾でS君のお母さんから、こういう話を聞いた。あるご婦人の方が――非常に信仰の深い人であったそうです――山を歩いていて、うっかり足を踏み外して、10メートルの崖下に落ちるといふ災難にでつくわした。その瞬間に

「主さまー！」

と、本当に心の底から叫んだ。そうしたら、叫んだ瞬間に、フワッと何か身が軽くなった。10メートルの下に落ちたら、大体どうかなつてしまう。ところが、ほんの少しのかすり傷だけで何ともなかったという。私はその話を聞いて、本当に頭がさがった。

「崖から飛びおりよ」

というような角度から、サタンがイエスを誘ったが、しかし、イエスは

「汝の神を試むべからず」

と。しかし、神さまの方は、或るのつぴきならない時に、その人の信仰を受けとって、これを救いたもう。あのサタンの誘いに対するのと全然反対に、この人は天使によって救わ



れたように、足も折らなかつた。ヘタすれば死んでしまいます。10メートルといたら大変なものです。驚きました。お医者さんや医薬にもちろん、大いに信頼して従つてよろしいけれども、しかし、生命そのものは、生命の根源は神さまのものである。この信を絶対にはずしてはならないと思うわけです。

ペテロは、信とまた疑いとのコントラストです。

「汝は神の子、キリストである」

と告白したペテロが、十字架に向かうキリストに、

「然^{しか}あらざれ」

というようなことを言つた。キリストは

「サタンよ、退け！」

とおつしやつた。明暗の交錯していたペテロです。ひとたび、御霊が彼のうちに内住してからは、使徒行伝の最初の方に出てくるあのペテロの如く本当にキリストの僕となった。もうはつきりとしています。

信とはどのようなことであるか。

「心安かれ、我なり」

という、この本願の^い効力に全托する。棄身でいく。信はこの棄身の態勢です。十字架された者は本当に十字架を負うことができる。

●鴻大なる福音

私はこの頃、NHKテレビの「赤穂浪士」をじつと見ております。あの義士たちの本当に棄身の、死を覚悟のうえの、主君に対する忠誠。我々はキリストの僕として、あの義士たちの魂に恥じないであろうか。主のためには――口先ではない――本当に全存在を主の証のために献げる。それは気分ではなくて、本当にその棄身の態勢の力ある実存が主の御霊をいただく。既に十字架されて主の生命に生きる者は、赤穂浪士以上の豊かなる心境をもつて、一つのことができるはずです。

この次に、「鴻大^{こうだい}なる福音」と題して私は証言したいのは、なんと今のキリスト教界は神経質な、ケチなことであるか。また、疑い争いの現象の出ているものか。パリサイに凝り固まっているか。こんなものをすべて突き抜けた世界は、この御霊をいただく信仰にあることを私は証言しないではいられません。

どうか、皆さんが本当に、四十七士のあの魂を、福音をもつて更に輝かしいまた深いものにしていく、それだけの悲願をキリストの本願によつていただいて進んでいく。人生は、それだけの生き甲斐があり、また、この福音がそのような証者を求めている。

「汝^{あかし}ら、証^{あかし}せずんば、叫ばずんば、石が叫ぶ」

とキリストが言われる。そんな氣持で私もいよいよ進んでまいります。人間的なくだらな



いことは乗り越えていただきたい。私たちを本当に、

「我、汝を救う。我、汝を助く。私だぞ」

と。キリストのこの

「私だぞ」

というこの一言。

「我は汝らの神、エホバなり」

と、モーセの十誡の終りにも書いてある。この宣言が本当に実力の裏付けである。この声を本当に私たちは聞く。その時に、もはや私たちが棄身ということは、決して力みでもなく、やむを得ないという迫力をもつて進んで行くことができる。八方破れであるが、決して破れないところの実存にされている。なんと私たちはキリストのこの本願を受けとらなければいけないことか。昔の坊さんたちがみなそういう角度で仏の世界で証していきましたが、いわんや、キリスト者というものがその上をいく。また、その下をいく。この底力とこの崇高さをもたないではいけないわけです。

何をして、グングン、智慧と力と光とが示されて貫いていく。皆さんはそれぞれ、それを体験しつつあると私は信じてますが、いよいよそうあってください。

●御霊における棄身の事態

⁵¹斯^{かく}て弟子たちの許にゆき、舟に登り給えば、風やみたり。

これは自然に風がやむように書いてあります。マタイ伝の方では、キリストは、

「³¹イエス直ちに御手を伸べ、これを捉^{とら}えて言い給う『ああ信仰うすき者よ、

何ぞ疑うか』」（マタイ14・31）

とおっしゃった。本当に聖書の文字は、平伏^{ひれふ}して読まなくては受けられない。

本当の神の前の平伏し――「フミニタス」といいますが――「謙虚」、自分が本当に平伏しということと、また、「デリミタス」、霊的な天的な事態、即ち言い換えると、御霊における権威、「御霊の権威」という神聖な事態と、完全に自分をそこに打ち捨てた棄身の事態、それは全く一つなんです。シュミルズという人はなかなかそういうことがよく分かっている註解者ですが、キリストは正にこの「フミニタス」と「デリミタス」を全的に証した人であるという意味のことが書いてある。申し上げているとおり、

「私は何ものでない」

とキリストがいつも自覚しておられたのはこの「フミニタス」である。神の権威においては何ものをも恐れずに神を証されたのは「デリミタス」です。「フミニタス」がなかったら、この「デリミタス」はサタンの「サタニズム」になってしまう。傲慢です。「ヒュプリス」という傲慢になってしまう。

これは絶対に私たちにとつて、信仰の事態として離すことができない。「フミニタス」は



即ち十字架です。十字架されていること。「デリミタス」は即ち聖霊です。聖霊における権威と、聖霊における人の本当に突き抜けた平安と樂さ、喜びと、何とも言えないものが、私たちの中に自由自在に私たちを豊かにしてください。

ペテロや弟子たちはこの際、非常にここがガタガタである。やむをえない。まだ聖霊を受けてない時ですから。これに反して、イエス・キリストはなんと驚くべき権威を、力をおびておられたか。しかし、それは全く神のものとしてです。風をも鎮められたことは何度もあったらしい。

「³²相共に舟に乗りしとき、風やみたり。³³舟に居る者どもイエスを拝して言

う『まことに汝は神の子なり』」（マタイ14・32～33）

と。「まことに汝は神の子なり」と、おそ懼れかしこむことは結構ですが、私たち自身が

「まことに我は神の子とせられている」

という恩寵を深く受けとる。我々は罪びとにすぎない。しかし、神の子にせられている。こういうような、我々の存在と使命、このことをまた新しくここで受けとるわけです。

どうか、皆さんも、日常の生活において床ゆかの上を歩いてますけれども、実は水の上を歩かしめられているという、そういう境地。キリストに全托されている。こちらから言えば、本当に棄身であるという、この棄身の態勢ほど実は強いものはない。己を惜しんでいるうちはダメです。しかし、この棄身の態勢のできるのは、御霊が来なければできない。ありがたいことに、この御霊が来ていると、これは死んでも死なない生命によって動いている。

そして、棄身の態勢の人は本当にこの棄身によって人を救いあげる。キリストは棄身の態勢で神の力で歩いてきましたから、沈みかかったところのペテロを捕まえて救いあげる。キリストだって、樂々と歩いて来たんじゃない。本当に神さまにより頼んでいた。もし、波が恐かったら、キリストも沈んでしまう。棄身の信で、全托の信で来たキリストは、このうろたえ疑い、沈み、死にそうになっているところのペテロを助ける。

「我なり。我、汝を救う」

と。ペテロは

「主よ、あわ憐れみたまえ、救いたまえ」

と叫んだ。信仰とはキリストの本願を受けとることなりと。このキリストの本願を受けとることを、体受すること、身体で受けとることを、「信」という。どんな人をも助け出そう、救い出そうとしているキリストの、神におけるこの本願。こちら側に何の条件をも要求なさらないキリストの無条件の本願。あるがままに――取り澄ましてではない――分裂のま、頑くなま、悲しめるまま、行き詰まれるまま、そのままこの本願に自分を全身で

「はいっ」

という声にして依り頼めば、必ず救いは来る。



●天衣無縫の実存

神のものとされ、キリストのものとされるということが、私たちの人生の目的です。それは、そうされることによつていよいよ証する。行き詰まっている人、悲しめる人に本当に救いをもたらすところの、私たちがキリストの手足となる。神の国はそうにして、ジリジリと建てられていく。神の国の事態は、ごまかしがきかない。どんなに立派な聖書研究ができましたとも、どんなに立派な本が書けましたとも、ダメです。

「汝らはキリストの書である。キリストの文字である」

と。イエスはひとつも文字を書かなかった。彼自身が即ち文字であつた。神の文字である。私たちは何をしようとも、それ自身が活ける文字である。それ自身が証の言葉である。

この大都會の、今のいわゆるふわふわした文化文明の世の中で、およそ違った世界を私たちは行く。しかし、決して何か狭くなったり、小さくなったり、妙な特殊になるのでは絶対にない。どんな現実にも、キリストがいかなる現実にも立ち入られたように――パリサイ人が招けば、そこへ行つて一緒に食事もなさる――何の分け隔てもない。本当に突き抜けた実存です。

私は時々、昔の無教会の人につくわしたりしますよね。向こうは何か避けようとする。私の方から逆にその人の名前を呼んであげる。私を何か妙にお考えかもしれないけれども。「我を視よ」と。私の中にいかなる隔てがあるか。懇ろに語つてあげる。向こうは「おや、おや」と思うでしょう。事実、今朝もそうでした。

御霊の現実というものは、

「我は一切の秘訣を得たり」

とパウロが言つた、その氣持がよく私たちの胸にしみ込んでくる。もう概念のイズムの世界ではない。イエス・キリストの本当に天衣無縫の実存が、なんと神さまの中において自由自在に動いておられたか。弟子たちが本当にキリストの御霊に捕らえられてからはどのようなことであつたか。どうか、そういうキリスト者として、証し人としてあつてください。晴れやかな――大愚は大賢であるというが――本当のクリスチャンというものは、もう何とも限定のできないところの、始末のわるい存在です。つかみようがない。私なんか、本当につかみようがないですよ、そういう意味において。

「何と言つても、それは的外れでございます」

というような始末です。そういうような、一如の、有限にして常に無限な世界は、この

「しつかりしろ、勇気をだせ。私だ。私を受けとれば、限りなく勇者となれるぞ」

と。そして、神さまの恵福な生命を証していこうと。どうか、この次の講演会は――講演会は単なる講演会ではありません――私は壇上に立とうが、皆さんは腰掛けてお聞きになろうが、みな打つて一丸となつて、この福音の証^{あかし}になりたいと、こう思つております。では、今日はそこまで。

